



診察前に行われる面談の様子。聞き取った情報をカルテに記載し、医師の診療をサポート。面談時間や回数は患者の理解度や病状に応じて変わる。1日に40人ほどの患者と面談をする



患者をクリニックに集めて病気や薬、運動など治療に役立つ情報を提供



これまで取り組んできたことを薬学生に伝え、薬剤師の可能性を伝えるのも自分の役目と話す伊藤さん



学会や講演会などでも積極的に発表。学会で出会った人たちと交流することで業務に生かせる情報を得ることができるといふ

04

診察前に薬剤師が面談を実施し、効果的な医療の提供を実現

2010年厚生労働省医政局から「医療の質および医療安全の確保の観点から、チーム医療において薬剤師の専門家である薬剤師が主体的に薬物療法に参加することが非常に有益である」という通知が発行されて以来、大学病院などを中心に医師と薬剤師が共同で薬物治療に取り組むケースが急速に増えている。院内で

計画の取り決めを行い、処方設計や処方オーダーの変更、検査オーダーといった医師の業務を薬剤師の判断で行うというもの。これによって医師の業務負担を軽減することに加え、薬の専門家である薬剤師が積極的に介入することにより、高度かつ安全な薬物療法が実現する。

愛知県小牧市にある平松内科・呼吸器内科小牧ぜんそく睡眠リハビリ

クリニックの薬剤師・伊藤光さんは医師の診察前後に面談を行い、医師の診療をサポートしている。

面談で得た情報を活用して薬物療法に積極的に介入する

同クリニックの院外処方箋の発行率は100パーセント。つまり伊藤さんの業務内容は患者と面談することが中心となる。初診患者の場合、診察前に患者の症状、経過、治療歴、既往歴やアレルギーの有無などを聞き取り、その情報を電子カルテに記入して、医師にフィードバック。医師はその情報をもとに診察を行う。診察後は、例えばぜんそく患者の場合、吸入薬の使い方や、ぜんそくの状態を客観的に知るために使われるピークフローメーター(力いっばい息をはき出したときの息の速さの最大値を測定)の使い方などを説明し、治療と自己管理の理解を促す。2回目以降も診察前に面談をして、吸入薬の手順や患者が記録したピークフローの確認、治療効果と副作用の有無をアセスメントする。治療効果がなければ、その原因を究明するために、薬の服用状況や使用法、生活環

境や心理的な背景なども丁寧に聞き取る。伊藤さんは、「限られた診療時間内で患者は医師に本音を伝えないことも少なくありません。病気や服薬に対する考え・不安・葛藤などを身近な存在として薬剤師が患者の本音を診察前にできる限り聴くことが、より適切な治療と継続につながります」と話す。

臨床心理士の資格も持つ伊藤さんは不眠症や睡眠障害の患者に対しては薬物療法だけでなく、認知行動療法などのカウンセリングも行い、睡眠薬の減量にも取り組んでいる。睡眠の領域については医師から特に信頼もあって、処方提案は受け入れられることが多いという。「精神疾患に伴う不眠の場合は、抗うつ薬などを処方提案することもあります。ただし、希死念慮(漠然と死を願う状態)など重症度を見極め、必要と判断したら速やかに専門病院を紹介することを提案します」と伊藤さん。

臨床の醍醐味は患者の喜びを感じ、その喜びを共有すること

薬剤師面談の目的は「医師の診断の一助となる情報収集とアセスメント」と「適切な薬物療法と非薬物療法の提案」と伊藤さんは説明する。それを実現するには、患者の話に耳を傾け、共感し、良好な関係を築くこと。そして患者が治療に前向きに取り組みるように医療者として方向性を示すことが重要と指摘する。「薬学教育が6年制になってからコミュニケーションを重視する教育が増え



カンファレンスでは医師、薬剤師、看護師、理学療法士などが集まり患者情報を共有し症例検討



いとう ひかる
伊藤 光さん
平松内科・呼吸器内科
小牧ぜんそく睡眠リハビリクリニック

薬学部を卒業後、地元の病院に勤務。その後、カウンセリングスキルを身につけるために、薬局で勤務しながら大学院で心理学を学ぶ。2010年に平松内科・呼吸器内科小牧ぜんそく睡眠リハビリクリニックの開業に伴い、同クリニックに勤務。薬剤師と臨床心理士の資格を活かし、患者をトータルにサポートする。趣味はテニス、スキー、ゴルフ。

ています。大学で学んだことを活かして患者をサポートしてほしいです」と話したうえで、「臨床の醍醐味は患者の喜びを共有し、それを自分の力にすること。それができるのが薬剤師なのではないでしょうか」と締めくくってくれた。